

ロミオとジュリエット

W.シェイクスピア 作 藤田貴大 上演台本・演出

二人はなぜ死に至ったのか、逆再生で検分する

野田秀樹の『小指の思い出』や寺山修司の『書を捨てよ町へ出よう』など名作戯曲を上演してきた演劇作家・藤田貴大が、初めてシェイクスピアに挑む。

逆再生で『ロミオとジュリエット』を演出する

きっかけとなったのは2年前、今は亡き演劇評論家・扇田昭彦との対談だった。『小指の思い出』の上演を前に、演出プランをめぐるトークイベントが開催されたのだ。

「そこで僕が話したのは、戯曲を一回解体して再構築することで、僕のリズムを作り出すってことだったんです。その話の流れで、『ロミオとジュリエット』をやるとしたら、二人が死ぬシーンを冒頭に持ってきて逆再生するかもしれないって話をしたら、ものすごく食いつかれたんですよ。それで本当にやることになったんです」

なぜ扇田さんはあんなに面白がってくれたのか——そこで思い至ったのは、「僕みたいな手つきの人間が挑むと面白ってことではないか」ということだ。

「これは忘れられがちなことですけど、ジュリエットは13歳でロミオは18歳なんです。いくら時代が違うとはいえ、そんなティーンの恋愛なんて拙いに決まってるじゃないですか。最後には死ぬってところに至ってしまうわけだけど、人ってそこまで振り切れてしまうことがある。その拙さっていうものは、僕がずっと描いてきたものでもある。『ロミオとジュリエット』を逆再生することで、それが如実になる気がする」



RoOTS Vol.03 寺山修司生誕80年記念「書を捨てよ町へ出よう」より

撮影：寺山修司



「小指の思い出」より

撮影：扇田昭彦

藤田作品の特徴として挙げられるのは、同じ台詞やシーンを繰り返すリフレインという演出だ。今年はシェイクスピア没後400年にあたるが、シェイクスピア作品も400年繰り返りリフレインされてきたと言える。

「シェイクスピアの作品ってもう、皆の頭の中にセットされてると思うんです。これまでの僕の劇だと、誰かがいなくなったということを繰り返し語ることによってその実像を描こうとしてきたんだけど、そのことは400年かけて既にやってくれている。そこに良い意味で甘えることで、二人が何で死んだのかってことを検分できる気がします」

モザイク画から一つの絵へ

シェイクスピアに挑む上で、藤田が思い出すのは蛭川幸雄の存在だという。扇田昭彦との対談で『ロミオとジュリエット』の話を出したのも、蛭川幸雄が演出した『ロミオとジュリエット』を観た直後だったからでもある。

「蛭川さんはアングラから商業演劇に活躍の場を移したときに批判されるんだけど、批判されながら最初に描いたのは『ロミオとジュリエット』だったんです。それも僕の中ではつながっていて、何で蛭川さんはこの作品をやるようになったのかってことも考えてますね」

今回、『ロミオとジュリエット』が上演されるのはプレイハウスだ。席数834席を誇るこのホールに藤田貴大が挑むのは『小指の思い出』以来となる。

「2年前は正直、プレイハウスの演出自体が精一杯だったんです。でも、あれから劇場の皆さんともいろいろ話し合ってきて、体制は整ったと思うんです。こないだ下見したときも、大きいと感じなかったんですよ。それに、去年の『書を捨てよ町へ出よう』で、コラボレーションをやりきったところがあって、今回はそれ以降の作業になる。これまでのコラボは、いろんな名前が並んでいて派手だったと思うんですよ。今回、新たに石橋英子さんと須藤俊明さんが音楽で関わってくれたり、衣装を大森伊予子さんが担当してくれたり、名前のある方も関わってくれるんですけど、藤田作品の一部として動いてくれている。そうすると、モザイク画みたいな絵ではなくて、一つの絵としてコラボができる。今回の作品は、絶対に良いものになると確信してます」

取材・文：橋本倫史(ライター)

12月10日(土)~12月21日(水) プレイハウス 詳細は13Pへ

作：ウィリアム・シェイクスピア チケット発売：10月15日(土)

上演台本・演出：藤田貴大

出演：青柳いづみ／あゆ子／石川路子／内堀律子／花衣／川崎ゆり子／菊池明明／小泉まき／後藤愛佳／西原ひよ／寺田みなみ／豊田エリー／中神 円／中村夏子／中村未来／丹羽咲絵／吉田聡子／山本達久

主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) 東京都／アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)



藤田貴大

©藤田貴大

りゅーとぴあプロデュース「オフェリアと影の一座」

11月30日(水)~12月4日(日) プレイハウス

詳細はP12へ



水と油が混じり合うと

ぼくと小野寺修二は水と油だ。右を指させば、左を向き、上だといえば、座り込む。でもたちまち、罠にはまり、彼の描くイメージの虜になった。彼は油のような本を水で溶かすつもりなのだ。彼は今、不可能に挑む冒険者である。

ミヒヤエル・エンデの絵本「オフェリアと影の一座」は、演劇を真正面から取り上げた、大のつく傑作である。両親は産まれた子供に、オフェリアという世界一有名な芝居のヒロインの名前を与える…無限の夢と希望を込めて。でも小さな声しか出せない、オフェリアさんは女優の才能はさっぱりなし。劇場の片隅で、ブロンプターとして、セリフを囁き続けるうちに、年老い、時代に取り残され、世間からのけ者にされ、自分の居場所をなくしてしまう。そこに主人を持たない影たちが集まって来て一座を作る。なんせオフェリアさんの頭の中には古今東西の名台詞が入っている。そして影の一座による奇跡が始まる。

「白石加代子と影の一座」、影の使い手は小野寺修二。影の心に光が当たり、水と油が混じりあえば、声をもたない心から素晴らしいイメージが溢れだし、夢の時間が始まる。シルク・ドゥ・ソレイユも、ひとつ飛びである。

文：笹部博司(りゅーとぴあ演劇部門芸術監督)

原作：ミヒヤエル・エンデ(岩波書店刊) 上演台本：笹部博司 演出：小野寺修二

出演：白石加代子／旺なつき／彩吹真央／彩乃かなみ／真瀬はるか／館形比呂／フィリップ・エマール／大庭裕介／辻田 暁／増井友紀子／藤田桃子／阿目虎南(大駱駝艦)／宮本正也(大駱駝艦)

主催：公益財団法人新潟市芸術文化振興財団 共催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

移動レストラン「ア・ラ・カルト —美味しいものは心を動かすところにある—」

12月16日(金)~26日(月) シアターイースト

詳細はP14へ



撮影：北村光隆

クリスマスシーズンを彩る、小粋で楽しいエンターテインメント

クリスマスシーズンのとあるフレンチレストランを舞台に、様々な人生のささやかで、しかし、かけがえない断片を、生演奏の音楽とともにショートショート芝居で綴る音楽劇『ア・ラ・カルト』。2014年に青山こどもの城が閉館されるまで、26年にわたって実に多くの観客に愛されてきた“冬の風物詩”ともいえる小粋なエンターテインメントショーが、装いも新たに東京芸術劇場にお目見えする。

演出は吉澤耕一。出演は、台本も手がける高泉淳子、パントマイマーの山本光洋、文学座の采澤靖起に、音楽監督でもある中西俊博(ヴァイオリン)、竹中俊二(ギター)、プレント・ナッシー(ベース)のほか、シンガー&アコーディオン奏者のパトリック・ヌジェがゲストミュージシャンとして参加。そこに池田鉄洋、近藤良平、春風亭昇太、三谷幸喜、山田晃士、ROLLYといった日替わりゲストも加わり、期間限定の移動式フレンチレストランという設定で、ワインと料理と恋の話を繰り返す。極上の音楽はもちろん、変幻自在にキャラクターを演じ分ける高泉らの歌にも乞うご期待。クリスマスシーズンにふさわしい、心温まるハッピーなひとときを味わいたい。

文：岡崎 香(演劇ライター)

演出：吉澤耕一 台本：高泉淳子 音楽監督：中西俊博

出演：高泉淳子／山本光洋／采澤靖起／中西俊博(ヴァイオリン)／竹中俊二(ギター)／プレント・ナッシー(ベース)

ゲストミュージシャン=パトリック・ヌジェ(アコーディオン) 日替わりゲスト(50首順)：池田鉄洋／近藤良平／春風亭昇太／三谷幸喜／山田晃士／ROLLY

主催：有限会社遊戯城 オフィス 共催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

COMING UP NEXT 2017.1-3

演劇・ダンス ラインナップ

NODA・MAP 第21回公演
「足跡姫」~時代錯誤冬幽霊~

2017年1月18日(水)~3月12日(日) プレイハウス

作・演出：野田秀樹

チケット発売：12月10日(土)

岩井秀人と森山未来のゴドモ発射プロジェクト
未来の大人と演劇はじめました(仮)

2017年2月18日(土)~3月12日(日)予定 シアターウエスト

チケット発売：12月17日(土)